別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　　語りとヴィジュアリティ

——シャーロット･ブロンテの一人称小説の軌跡——

氏　　名　　杉村　藍

論 文 内 容 の 要 旨

序論

シャーロット･ブロンテ (1816-55) は少女期からの創作活動を通して物語と絵画が相互に影響しあう独特の語り方を身につけていった。彼女の語りの技法、そして作品に描かれる絵画的・視覚的な要素は、それぞれ独立した研究テーマとしてブロンテ研究の一翼を担ってきた。しかし、彼女が子ども時代から育んできた物語と絵画が結びついた創作方法を考える時、はたして両者は個別に取り上げられるべきなのか。本論文では、シャーロットが強い関心を示して取り組んできた語りの手法と物語のヴィジュアリティ（ヴィジュアルな要素）は、融合することによって独自の表現を生み出しているという仮説を立て、その仮説を実証することを目的とした。

第一部　リアリズムへの挑戦——『教授』

『教授』(1857) はシャーロットが少女時代から長く続いた初期作品の世界と決別し、職業作家を目指して最初に執筆した本格的小説である。だが、彼女の初めての試みはぎこちなく、結局 9 回も出版社の拒絶にあい、生前に出版されることはなかった。この小説がいわゆる「失敗作」とされる所以にも語りの手法や視覚的要素が関係していると考え、それを論証した。

第 1 章　都合のよい真実——『教授』における科学的観察

『教授』では、ヴィジュアルな要素として、19 世紀に欧米で広く人気を博していた、顔面や頭骨といった外見を観察する観相学と骨相学が重要な役割を果たしている。興味深いのは、語り手であり主人公でもあるウィリアム・クリムズワスが、あまり重要でない登場人物の描写にこの擬似科学に基づく分析を多用している一方で、自分自身を含め作品の中心人物に関してはそうした描写を拒んでいる点である。

これは地位も財産もなく社会的には弱者の立場にあるクリムズワスが生存のために採った方策と関連している。彼は「観察」という見る行為によって情報を収集し、その分析に観相学や骨相学を

用いることで科学的な客観性を保持しようとしている。それと同時に他者からの視線を避けることで、自分自身の情報を不用意に相手に与えることなく自分の優位を確保しようとしている。彼が自分の外見について多くを語ろうとしないのは一種の情報統制である。外貌の詳細な描写、特に観相学や骨相学の判断材料となる説明を制限することで、自己防衛をしているのである。

クリムズワスは自分に都合のよい真実だけを選び出し、それらを巧みに組み合わせることで、勤勉で誠実な男を描いた理想的なサクセス・ストーリーとして自分の半生を語り直している。彼は都合のよい理想像を示そうと自身の外貌に関する情報を大幅に制限した結果、出版当時の読者にほとんど印象を残すことがなかったが、この作為的ともいえる選択的な眼差しこそが、小説をいわゆる失敗作に貶めているという点を論証した。

第 2 章　破綻する語り――『教授』におけるクリムズワスの創造性と語りの綻び

『教授』執筆に当たり、作者は「序文」で「現実の生きた男たち」を描こうとリアリズムに基づいた創作方針を明らかにしている。そうした意図を反映するかのように、作品の主な舞台となるブリュッセルの描写にも実在する街や通りが忠実に再現されている。しかし、語り手クリムズワスは時として描写を一方的に切り上げてしまったり、あえて語るのを控えたりすることがあり、その物語は単純に彼が見たままを言葉に移し変えたとは言いがたい。

『教授』の未定原稿の断篇を比較してみると、初期作品後の習作から『教授』の執筆、改訂の試みという一連の流れの中で作者が最終的に選択したのは、主人公について他者が語るのではなく、自らに語らせるという手法であることが明らかになる。間に第三者を介さないことにより、伝えるべき情報の選択もその伝え方もすべて主人公自身がコントロールできるのである。だが、そうした支配的な語りを駆使して、勤勉で高い知性を持つ誠実な男の成功譚として語ろうとするクリムズワスの欲望こそが、彼の語りを歪めてしまっている。彼の極めて意図的な視線と語りは、初めての本格的な小説を何とかコントロールしようとあがく作者の必死な姿をも映し出しているのである。

第二部：語りとヴィジュアリティの融合――『ジェイン・エア』

『教授』の失敗体験にもかかわらず、シャーロットはそれをばねに新しい物語を生み出す力に溢れていた。第 2 作『ジェイン・エア』(1847) では女性主人公を一人称の語り手として起用するという、当時としては新しい手法に挑戦している。そして、この語りの手法は、作者が少女時代から絵画修行を通して育んできたヴィジュアルな視点と見事な融合を遂げているのではないだろうか。

第 1 章　語り手への道のり――ジェイン･エアの描いた軌跡

出版と同時に一大ベストセラーとなった『ジェイン・エア』には、読者を惹きつけ最後まで一気に読み通させる勢いがある。しかし、主人公であり語り手でもあるジェインは最初から優れた語り手だったわけではない。物語は少女ジェインが「気持ちよく口がきけるようになるまで、黙っていなさい」と、他ならぬ一人称の語り手自身が語ることを禁じられる場面から始まる。

成長してからも、ジェインは語り手というよりも聞き手として天性の資質を発揮している。彼女は相手が心に秘めた思いを時に自然に引き出し、時に思い切って相手の心に踏み込むことによって聞き出す。ジェインは注意深い観察者でもある。彼女は対象をある時は密かに見つめ、またある時は観相学や骨相学の知識も駆使して、外見だけでなく内面までも見透かす。こうした聞く・見ると

いった一見、語りと無関係に思える行動が、ジェインにとっては自分の物語を魅力的なものとして語るための情報収集活動となっている点を考察した。

だが、ジェインは自分が集めた情報をすべて語っているわけではない。ロチェスターをはじめとする他の登場人物から得た情報を語らずに保留しておくことにより、彼女はより多くの情報を持つ者として優位に立つことができる。そこには情報を誰が語るのかという語りの主権をめぐる抗争の構図も読み取ることができる。このせめぎ合いにおいて、ジェインがいかにして語りのヘゲモニーを握るのか、そのためにどのような方策を講じているのかを分析した。同時に、彼女が語り手として自分の半生を語り出すまでになぜ 10 年もの時間を要したのかについても考察した。

第 2 章　『ジェイン･エア』におけるヴィジュアリティとその効果――ビューイックの謎を解く

『ジェイン・エア』にはヒロインであるジェインが見たり、描いたりする絵が多く登場する。中でも小説の冒頭で出てくるトマス・ビューイックの『英国鳥類史』に掲載されている木版画の挿絵は重要である。ジェインのような幼い子どもが好みそうにない陰鬱な版画が次々と描写され、これらの挿絵とジェインとの関係がつかめないまま、読者は物語を読み進むことになる。だが、ビューイックの木版画に関する記述が長々と続く、この不可思議さこそ、読者がこれらとストーリーとの関連を解き明かそうと物語に深く関わる誘因として機能している。墓場や難破船など暗然たる挿絵のモチーフが、少女ジェインの内面の表象となっていることは言うまでもないが、彼女の視線の先を共に追うことで、いつしか読者はヒロインと一体化していく効果も備えている。

『ジェイン・エア』に登場する絵としては、成長したジェイン自身による第 13 章の 3 枚の空想画が、ビューイックの影響が色濃く見て取れる点で重要である。沈みかけた船や極地の氷山など描いているモチーフも、全体の寂寞とした雰囲気も共通している。しかし、少女のジェインと大人になったジェインとでは、対象とする絵（挿絵）を説明する際、当然のことながらその描写の仕方は異なる。ビューイックの挿絵やジェインの水彩画の説明が、絵画などの視覚的な芸術作品を言語によって詳細に描写するエクフラシスに該当するものとして、その効果を検証した。

ヒロインの少女時代から始まる自伝を成立させる上で、ビューイックが果たしている役割は大きい。長く続く挿絵の説明は、自分が興味を持った対象に没入する 10 歳の子どもの姿をリアルに表現しており、この自伝が成人したジェインによってさらに 10 年の時を経たうえで執筆されているという時間的な隔たりをまったく感じさせないからである。このように、『ジェイン・エア』においてビューイックの木版画がいくつもの重要な働きを担っている点を浮き彫りにした。

第 3 部：実人生を映した歪み――『ヴィレット』

最後に執筆した小説『ヴィレット』(1853) において、作者は再び女性主人公が一人称の語り手を兼ねるスタイルを採用している。しかし、ヒロインのルーシー・スノウはジェインと異なり、その語りは時に曖昧で、読者にさえ事実を明かさないことがある。「信用できない語り手」と呼ばれるルーシーの語り、彼女の視線の背後に、作者シャーロットの人生体験の影響を読み取った。

第 1 章　黙した語り手――ルーシー・スノウが描く曖昧な結末

『ヴィレット』の主人公、ルーシー･スノウには謎が多い。物語のヒロインでありながらその立場を主張せず、目立たぬように影に引っ込んでいる。彼女が見せる相矛盾した性質とその行動につい

て考察し、その起因を彼女の過去の経験に探り、子ども時代の過酷な経験を通して生き残るための自己防衛策として自分の感情を抑圧していることに帰着した。そして、ルーシーの過激な自己抑圧こそ、彼女の行動と語りに深刻な歪みを生じさせ、彼女を「信用できない語り手」としていることを証明し、物語の最後でムッシュ・ポールがどうなったのか、結末を曖昧に残したままにしている理由を探求した。

結末においてムッシュ・ポールの死を明確にしなかったもう一つの理由として、一般には作者の父親が幸福な結末を望んだためとされているが、作者が『ヴィレット』執筆前に相次いで 3 人の弟妹を亡くすという悲劇的な経験が影響していることも大きな理由になっていることを論証した。

第 2 章　物語を紡ぐ光と影――『ヴィレット』におけるヒロインの謎

『ヴィレット』のオープニングを読んだ者は、この小説の主人公を風変わりな少女、ポーリーナ・ホウムだと思うだろう。第 4 章で姿を消した彼女に代わり、それまで傍観者として彼女を観察してきたルーシー・スノウが突如、主人公として読者の前に現われる。『ヴィレット』は誰を描こうとしている物語なのか。この小説の異なる書き出しである 3 つの断篇と『ヴィレット』の清書原稿の修正箇所に着目し、ポーリーナが中心的に描かれるオープニングも含めて、シャーロットが最初からルーシーをヒロインに据えることを意図して書いたものであることを明らかにした。

ポーリーナの容姿や身分は、まさしく「人生の日向」を歩むために生まれてきた者のための設定である。そして彼女とは対照的に、ルーシーは「人生の道のりが・・・山の日陰側を辿る」。この光と影（陰）の対照を際立たせることこそが、人生の日陰を生きるルーシーの姿をよりリアルに表現する方法だった。光と影は視覚情報の最も基本的な要素である。ヴィジュアリティの根本ともいえるこの 2 つの要素が、『ヴィレット』の二人の女性登場人物を描き出すために用いられている。『ヴィレット』冒頭でポーリーナは人々の注意を惹きつけるが、それは彼女がルーシーの抱える闇の深さを強調するための存在として利用されているからである。

明暗に象徴される運命論的な考え方は、19 世紀イギリスが経済的発展を遂げる一方で、富裕層と貧困層の社会格差が深刻化した状況と呼応するだけでなく、作者が弟妹を失った絶望感を反映している点から、彼女が経験した苦悶がそのまま作品にも歪みとして投影されていることを証明した。

結論

シャーロット・ブロンテの作品研究においては、語りの技法、そして絵画的・視覚的な描写法はいずれも重要な研究テーマとされてきたが、従来の研究ではそれぞれ個別に取り上げられるだけで、これらが融合することで生じる効果に着目した研究は筆者の知る限り存在していない。本論文では、3 つの小説の分析を通して、それぞれの主人公を兼ねる一人称の語り手がどのように語り、その視点を時に補完し、時に活かすために様々な視覚的な要素、ヴィジュアリティが活用されていることを明らかにした。幼い頃から文章を書き、絵を描いて創作活動をしてきた作者は、見るという行為に強い関心を持っていたが、彼女の作品は語りの技法、絵画的描写力の両者が緊密に影響しあって作品世界が創造されており、これこそが見ることに取り憑かれた時代、19 世紀イギリスを生きた作者の独創的な特徴である。その特徴を語りとヴィジュアリティの融合という視点から分析した点に本論文の独自性がある。